築地朝塾
［ニュース］
―第7号―

「誠実」を胸に刻もう

第8期 毎回火曜日 4月9日 午前7時から

「教えるとは　ともに希望を語ること　学ぶとは　誠実さを胸に刻むこと」――。フランスの詩人、ルイ・アラゴンの詩のフレーズです。受講生はこれまで延べ77人の講師から様々なことを学び、多くの刺激を受け、誠実さを胸に刻んできました。8期でもさらに深く刻まれることが期待されます。

トップバッターとして4月9日にともに希望を語ってくれるのは、前農水相の齋藤健衆院議員です。「ゆでガエルにならないために」というテーマで、ごく緩やかな変化に気付かず、対処しなかったら大変なことになる、という戒めから貴重な話が展開されるでしょう。

魅力あふれる講師陣

時代をまたいで全10回

毎週火曜の朝に各界の超一流の人たちの話を直に聴き、日本の将来を支える人材に育ってもらおうという「築地朝塾」の第8期春塾は4月9日から東京・築地のアクアショールームで開講します。平成から新しい時代をまたぐ今期は、大型連休もあり2回の休講を挟んで6月25日までの全10回を予定しています。政治・時事、環境、歴史、国際情勢など今期も各方面の魅力あふれる充実した講師陣が顔をそろえ、学ぶことの多い価値ある話をしてくれます。

続いて16日は、日本地震学会会長の山岡耕春氏が、昨年1月に今後30年以内に70～80%の確率で起きると予想されたマグニチュード8～9級の南海トラフ地震や、30年以内に70%の確率とされる首都直下型地震に対する備えなどについて教えてもらえます。

環境省地球環境審議官だった梶原成元廃棄物・3R研究財団理事長は「地球環境問題がビジネスを変える～日本の常識は世界の非常識?」という興味深いテーマで講演します。

休講明けの5月14日には軍事アナリストの小泉悠氏が「軍事面から見た日露平和条約交渉」と題し、ロシアとの平和条約交渉についてのホットな話題を他とは違った切り口で解説してくれるでしょう。

歴史に学び、未来を考えるという「米欧亜回覧の会」代表の泉三郎氏は「堂々たる日本人～知られざる岩倉使節団」というタイトルで、明治初期に欧米諸国に派遣された大使節団「岩倉使節団」について21日に詳しく話してくれます。

子どもの貧困に取り組むNPO法人キッズドアの渡辺由美子理事長は28日に「子どもの貧困～未来へつなぐためにできること」と題して、また、「辺野古」県民投票の会の元山仁士郎代表は、埋め立て反対が圧倒的多数を占めた結果を踏まえ6月4日、「県民投票のこれから――日本のみんなに共に考え行動してもらいたいこと」と題して語りかけます。

アジアの歴史と文化に関する専門図書館で、研究所でもある東洋文庫の杉浦康之専務理事の題目は「東洋文庫への誘（いざな）い」です。

公正取引委員会の杉本和行委員長は18日、GAFAなどネット社会で起きている情報の独占に関わる様々な問題について話してくれます。

２０１９春塾の掉尾を飾るのは朝塾顧問でもあり、朝塾がスタートした15年の秋塾で最初に講演し、16年秋塾でも登壇した外交評論家の岡本行夫さん。3回目となる25日の講演は「激動の世界情勢を読み解く」とのテーマで流動化する国際情勢を解説してくれます。ここでしか聴けないビビッドで中身の濃い話が楽しみです。

2018年秋塾　講演風景

「存念」

「存念」という言葉があるとは知らなかった。仙谷由人さん（元内閣官房長官）から聞いた。「心に残った……つまり伝えたいが言い切れなかった思いのことを言うんだ」。

テレビ番組収録を終えた仙谷さんはポツリと言った。

「番組で何か言い残したことがあるんでしょうか」と尋ねた。「いやいや。この歳（72歳）になると日々そう思うんですよ。沢山の人の思いに応えられたか。自問してるんだ」。化粧室の大きな鏡を見ながら返してくれた。

その2週間後、まさかの訃報を新聞で知った。

仙谷さんも私も敗戦直後の生まれだが戦争の悲惨さはまだ日常の隣にあった。「戦争に行ってきた軍人さんだよ」と私の手を引いている母が言う。片足が無い人。片目に眼帯をしている人。松葉杖で身体の平衡を保ちながらアコーディオンを弾いている。駅前で弾いている。

「貴様と俺とは同期の桜……」。戦意高揚だったはずの軍歌が悲しげに地を這う。迫る闇に傷痍軍人の白い姿が浮かぶ。人の足が止まる。誰も貧しい。しゃがんだ母は転がっている鉄兜にそっと小銭を入れた。木枯らしが吹き抜ける。母の皹（あかぎれ）の手と併せて記憶から消えない。

「戦争のない平成の30年」が終わる。

仙谷さんの死から2カ月ほど経った昨年の師走の夜、13歳で玉音放送を聞いた方に築地の料理屋に案内された。財務大臣を務めた博覧強記の政治家は「いやいや是非見ておいて欲しいものがあるんで」と女将を呼んだ。部屋に運ばれたのは一幅の掛け軸。

「禍莫大于恣己之慾」。山本五十六連合艦隊司令長官の書だった。読めない。女将が詳釈してくれる。

「禍（わざわい）とは己の慾を恣（ほしいまま）にすることより大なるはなし」

昭和16年秋、五十六は真珠湾攻撃の図上演習を繰り返していた。書は奇襲2カ月前のもので陸軍中枢への怒りを表したものと歴史家は読む。

留学生として更に駐在武官として在米経験豊かな五十六は陸軍右派の暗殺リストの1行目に載っていたというから、どれだけの思いの丈をこの書にぶつけたか。75年の時を越え私にも伝わってきた気がした。仙谷さんの思いを聞き、五十六の掛け軸と向かい合い、「存念」の二文字の深さが胸に迫ってきた。

思いを言えない、伝え切れない。禍（わざわい）を止められない非力を背負う修羅。

「存念」を知って思った。「念」という言葉は人の生き方を律する。

「理念」「信念」「丹念」「一念」「専念」「執念」。

発信しながら、受信しながら生きて行く私たちだが、やがて生きる道を定めなくてはならない。「断念」「無念」と歩みが止まることもあるが立ち上がらねばならない。

手元に2015年7月付けの「入院診察計画書」が残っている。患者名は平本和生だ。

トロサ・ハント症候群が病名だが、その「入院診察計画書」の裏に「築地朝塾〝計画書〟」の〝原型〟が書かれていた。「ここを出たら（退院したら）次の世代の役に立ちたい」とあった。

人も居ない、場所もない、金もない、ツテもない。やる気だけがあった69歳だった。

長く組織にあり、確かな仕事は必ず社会に貢献しているとしてきたが、それは組織あってのことで、組織を離れ組織の力を借りないプロジェクトの先は覚束なかった。そこにTBSの外の友が何人も協力をかって出てくれた。病棟の談話室が作業場となる。そこで生まれたコンセプト＝〝理念〟「次の世代のため」プロジェクトは、その為の「土俵作り」へと具体化されていった。無償の汗をかこうと語りあった。

あれから4年目の春がやって来て第8期が始まる。「築地朝塾」はまだ途上だ。思いの丈を存分に打ち込めていない未完だ。「存念」が漂う。

築地朝塾 塾長　平本 和生

平本 和生（BS-TBS前会長）

1969年 早稲田大学 政治経済学部卒業、東京放送に入社。テレビ本部報道局テレビニュース部、政治部を経て、'84年に外信部ワシントン特派員。'88年10月～'90年3月まで「JNNニュースコープ」のメインキャスターを務める。その後、政治部長、報道局長、TBSビジョン社長、TBS常務・専務を歴任。2009年から'14年6月までTBSホールディングス取締役兼BS-TBS社長を務めた。

● 塾舎　「株式会社 アクア」ショールーム
〒104-0045 中央区築地2-11-26
築地MKビル1階
東京メトロ日比谷線「築地」徒歩3分

フェイスブックの活用について

塾生同士の交流を活性化するため、フェイスブックのグループ「築地朝塾コミュニティ」を開設しています。限られた朝の時間ではなかなか交流することができない、という声に応えたものです。塾の講演の感想、塾生の懇親会の連絡など、自由に活用してください。ただ、「非公開グループ」で、投稿を見ることができるのはメンバーのみです。フェイスブックのアカウントを持っている人は、参加申請をして、参加してください。

参加方法は、①フェイスブックの画面で「築地朝塾コミュニティ」を検索⇒②画面上の「グループに参加」をクリック（タップ）⇒③参加申請⇒④管理者の承認⇒⑤メンバー……の手順です。

201904朝塾新聞2019春.indd　1-2

2018年 秋塾の講演から

時代の変化とJFRの成長戦略

山本 良一 氏
J.フロント・リテイリング代表執行役社長
（9月4日）

「時代の変化」の質が変わっている。今までの連続的な変化と比べると、きわめて不連続、断続的で、その変化が急激でスピードが速い。次の50年の成長を捉えるためには、「非連続な成長」へ経営の舵を切らなければならない時代なのだと認識している。

社外取締役を含めて1年ほどかけて合宿をして、10年、20年先の姿を真剣に議論して「グループビジョン」を決定した。生活のプラスの面とマイナスの面、両方を見つめて暮らしの全シーンにおいてお客様の役に立つ企業になりたい。

成長戦略の柱のプロジェクトとして取り組んだのが、昨年開業した「GINZA　SIX」。開業1年で売り上げ目標の600億円をクリアし、来店客数は2千万人を達成した。「非連続な成長」の象徴的な店舗だ。特徴はブランドの「旗艦店」が非常に多く集まっていること。各ブランドの日本で最高の店が、銀座にある、という組み立てになっている。

観光先進国を目指して

田川 博己 氏
JTB代表取締役会長
（9月18日）

ツーリズム産業の波及効果は53兆から54兆円ぐらいある。世界全体のGDPに占めるツーリズム産業の経済波及効果の割合は10・4％なのに対し、日本は5・4％。雇用に占める割合は世界全体が9・9％で、日本は6・9％だ。国が「成長産業だ」と言っている割には、観光庁の予算は100億円くらいしかない。1000億円くらいあってよい。

「観光分野における国際競争力ランキング」で、日本は2009年に25位だったが、着実に順位を上げて、17年には4位になった。国が、旅行や観光産業の優先度を向上させたことも、上昇につながっている。

観光というのは20年、30年の歴史を見る必要がある。できるだけ若者にやっていただきたいというのが、この観光の仕事だ。

明るい介護

阿川 佐和子 氏
作家、エッセイスト
（9月25日）

講演は、予定通りに行われましたが、本人の申し出により講演要旨・写真の掲載は行いません。ご了解ください。

まっとうな政治を取り戻すために

辻元 清美 氏
衆院議員、立憲民主党国会対策委員長
（10月2日）

初当選は22年前で、36歳だった。女性議員の草分け的な存在である土井たか子さんに「（国会議員を）やってみないか」と声をかけられた時、土井さんは「私はどこへ行っても、女性1人なのよ」とよく言っていた。現在でも女性議員は1割ほどで、私も「女性1人」ということが多い。私は2世でも3世でもない。

うちは小さな立ち食いうどん屋をしていた。父方の祖父はブーゲンビル島で戦死している。どちらかというと、経済的に苦しい家の子だった。

この間、安倍政権にはいろんな問題があった。沖縄でどんどんヘリコプターが落ちる、働き方改革でのデータ捏造、イラクの自衛隊日報の隠蔽、森友問題で財務省の文書改ざん、加計問題で柳瀬元首相秘書官が加計学園と官邸で3回も打ち合わせをしていたとか、どんどん問題が出てきた。どうして、こんなにいろんなことが出てくるのかと考えると、私は、原点は「赤坂自民亭」のような姿だと思う。ほとんどが世襲議員。自民党の3分の2ぐらいが世襲だ。日本はこれでいいのか、と思っている。いま、官僚は総理大臣の顔色を見て出世競争をしている。国民のために働いていない。そして2世、3世ばかりが仕切っている国になっている。

作り方を作る

佐藤 雅彦 氏
東京藝術大大学院映像研究科教授
（9月11日）

いきなり映像や、音楽、ゲーム、書籍を作っているわけではない。電通時代にクリエイティブ局に所属を変えた時、「作り方を作ろう」という意識を持った。「作り方が新しければ、自ずと出来たものは新しい」という信念があり、これに賭けた。

自分が小さい時、マーブルチョコレートが明治製菓から出た時にCMで「マーブル、マーブル、マーブル、マーブル、チョコレート、ポン」となった。これ、何でいまだに覚えているのだろうと考えた時に、「映像は音が大事だ」と思った。その時決意したのが、「自分だけの作り方で、とにかく映像を音から作ろう」ということだった。音がすごく武器になると思った。これが、僕の映像の作り方で最大の発見だった。コマーシャルの企画が来た時に、映像は全く考えない。音から考える。音さえ良ければ、いいと思っている。

新しいものを作る時は、作り方から作ることをモットーにしている。最近は映像におけるプログラム教育や、脳科学をもとにした映像研究に取り組んでいる。皆さんもオリジナルな作り方から考えて、ものごとを注視してほしい。

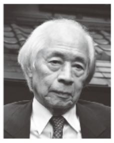
春塾　講師紹介（予定、敬称略）　4月30日、5月7日は休講です。

「県民投票のこれから――日本のみんなに共に考え行動してもらいたいこと」

6月4日

元山 仁士郎
（もとやま・じんしろう）
「辺野古」県民投票の会代表

沖縄県宜野湾市（米軍普天間基地の所在地）出身。一橋大学大学院を休学し（4月から復学）、県民投票条例の制定、県民投票の実現に動き、法定必要数を大きく上回る92,828筆の署名を集める。不参加を表明した5市長に参加を促すため、ハンガーストライキを実施。県民投票では、投票者の71.74％が埋め立てに反対の意思を示す。



「堂々たる日本人～知られざる岩倉使節団」

5月21日

泉　三郎
（いずみ・さぶろう）
「米欧亜回覧の会」代表

1935年生まれ。一橋大卒。事業経営のかたわら、76年から岩倉使節団を追う旅を続け、約8年かけて主なルートをたどった。96年に「米欧亜回覧の会」を設立。「米欧回覧実記」などの輪読や近代史研究などを行っている。著書に「岩倉使節団」（祥伝社黄金文庫）。会編さんの新刊に「岩倉使節団の群像～近代日本化のパイオニア」（ミネルヴァ書房）。明治4年から1年9か月をかけて欧米を回った「誇り高き日本人」に迫る。

「地球環境問題がビジネスを変える～日本の常識は世界の非常識？」

4月23日

梶原 成元
（かじはら・しげもと）
廃棄物・3R研究財団理事長

1955年富山県生まれ。79年3月、東京大工学部都市工学科卒、4月環境庁（当時）入庁。環境庁・環境省時代は、国連ESCAP（バンコク）勤務をはじめ、地球環境問題（京都議定書の実施ルール・パリ協定などの国際交渉から、地球温暖化対策事業・エネルギー計画などの国内対策まで）、廃棄物リサイクル問題（廃棄物処理法の改正・諸基準の策定、災害廃棄物対策の強化etc.）に広く従事。2017年7月に国際担当の総責任者である地球環境審議官を最後に退官。　18年7月より、現職。

「ゆでガエルにならないために」

4月9日

齋藤　健
（さいとう・けん）
衆院議員、前農水大臣

1959年、東京都生まれ。1983年東京大経済学部卒。経産省入省。日米通商交渉、エネルギー政策、行政改革等に携わる。ハーバード大院でMPA取得。埼玉県副知事を経て国政に（当選4回）。環境大臣政務官、農水副大臣、農林水産大臣を歴任。現在、党ＴＰＰ・日ＥＵ・日米ＴＡＧ等経済協定対策本部事務総長。趣味はハンドボール。著書に「転落の歴史に何を見るか（ちくま文庫）」。

「東洋文庫への誘(いざな)い」

6月11日

杉浦 康之
（すぎうら・やすゆき）
東洋文庫専務理事

1953年生まれ。東京都出身。東京大経済学部卒。78年三菱商事入社。95～97年オハイオ州コロンバスにて鉄鋼加工所を経営。その後2003年まで同社ワシントン事務所長。同社国際戦略研究所長、業務部長、広報部長などを歴任。13年より常務執行役員として北米統括（ニューヨーク在住）。16年6月から1年間、ハーバード大学アジアセンターフェロー。現在、同センターの国際諮問委員。17年6月から公益財団法人東洋文庫の専務理事を務める。

「子どもの貧困～未来へつなぐためにできること～」

5月28日

渡辺 由美子
（わたなべ・ゆみこ）
ＮＰＯ法人「キッズドア」代表

1964年生まれ。千葉大学工学部出身。大手百貨店、出版社を経て、フリーランスのマーケティングプランナーとして活躍。2000～01年にかけて家族でイギリスに移住し、「社会全体で子どもを育てる」ことを体験する。09年内閣府の認証を受け、特定非営利活動法人「キッズドア」を設立。子供たちに「学びの場」を与える活動を続けている。内閣府「子供の貧困対策に関する有識者会議」参加。http://www.kidsdoor.net/

「軍事面から見た日露平和条約交渉」

5月14日

小泉　悠
（こいずみ・ゆう）
東京大学先端科学技術研究センター特任助教

1982年生まれ。早稲田大大学院政治学研究科修了。民間企業勤務を経て、外務省専門分析員、ロシア科学アカデミー世界経済国際関係研究所客員研究員として2009～11年ロシアに滞在。19年3月より現職。専門はロシアの軍事・安全保障。主著に「軍事大国ロシア 新たな世界戦略と行動原理」「プーチンの国家戦略 岐路に立つ『強国』ロシア」。

「南海トラフ地震と首都圏直下地震　どう備えるか」

4月16日

山岡 耕春
（やまおか・こうしゅん）
日本地震学会会長、
名古屋大教授

1958年生まれ。静岡県出身。名古屋大学地球科学科卒。同大学院、助教授などを経て2003年から教授。16年4月から防災教育推進協会理事長、同年5月から日本地震学会長に就任。地震予知連絡会副会長。火山噴火予知連絡会幹事など。近著に「南海トラフ地震」（岩波新書）。南海トラフはマグニチュード8～9クラス。今後30年内の発生確率が約70％とされる巨大地震。どんな規模で、どう備えればいいのだろうか。

2019/03/29　12:24:58

2018年 秋塾の講演から

人を見る目 私的ノンフィクション論

保阪 正康氏
ノンフィクション作家
（10月23日）

歴史の見方には二つのタイプがある。一つは演繹的な唯物史観、あるいは皇国史観などの文明史観だ。こういう形だというところから下りて、史実を拾い集めてつくられる。

私は30代に入ったとき歴史はそうではなく、いろいろな人が経験してきたことの累積でその中に本質があると思った。事実とは何か、史実とは何かを調べ帰納的に下から積み上げていくと、歴史はこういうふうに動き、こういうふうに因果関係を持つのかと理解できる。

実証主義史観と呼んでいるが、実証的に事実を見ていかないと、人の動き、人の心理は分からない。徹底的に調べ、そのうえで何が本当か、どういう法則があるのかを検証する。

それには体験者の話を聞くことだ。史実を確認し、何が大事なのかを理解していく。結論的に言えば、「記憶」を父親に、「記録」を母親にして「教訓」という子どもが生まれるというのが私の立場だ。

本題の「人を見る目 私的ノンフィクション論」になるが、それは「人に会う」ことだ。

日本だけでなくアメリカや中国、韓国、イギリス、ロシア、インドネシア、シンガポールなどにも行き、これまで4000人と会ってきたが、その経験から私は「1対1対8」という法則を作った。

初めの1割は、本質的にまじめで本当のことを言う誠実な人だ。人間としての資質の問題。こういう人は絶対的に信頼できる。

後の1割は初めからうそをつく人だ。こちら側の知識に応じてうそをつく人もいる。高名な人に多いが、「違うのでは」と指摘すると、「記憶違いだった」などと言ってこちらを試す。

残りの8割は私たちだ。記憶は常に美化され操作される。問題はそれを見抜く力があるかどうかだ。なぜ美化するのか、なぜそういう心理状態になるのかを考えることが、人との出会いで大事だ。

史実の積み重ねを単なる知識にするのではなく、一つの場面に置き換え、人がどう動くかを見ていく。私たちの仕事で言えば、ノンフィクションとしてどういうふうに創作の原点にするかだ。それが人を見る時のこつだと思う。

夢持ち続け日々精進

髙田 明氏
株式会社ジャパネットたかた 創業者
（10月16日）

「未来じゃなくて今という瞬間の課題に一生懸命向き合って、それを潰していく」ことが大切だ。明日を変えずして1年後、5年後、10年後は絶対に変わらない。多くの人が誤解しているが、「学んでいるつもりで、学んでない」ことがある。「つもり」の中に生きていたら堂々巡り。思うとおりの自分になっていかない。私が好きな言葉は「夢持ち続け日々精進」だ。昔の夢も、30歳の初心も同じで、夢というのは70歳になっても80歳になっても形を変えながら持ち続けるからこそ人生が楽しい。成功とはお金や名声ではない。人は人のために生きてこそ人、という言葉が大好きだ。プロセスを大切にして一生懸命に、今を生きていく。何歳からでも遅くはない。

ミッションを考える

片山 善博氏
早稲田大公共経営大学院教授
（10月30日）

ミッションは日本語で言うと使命だとか究極の目的になるが、知事、総務大臣の時も、わかりやすくこれを伝えて共有することに努力した。最近企業で不祥事が多い。

KYBでは、免震装置の偽装、計算データの改ざんということが平気で行われていて驚いた。

シャープは鳥取への工場進出計画で県に補助金を要求した。本来は補助金より人的、環境などで進出を判断すべきなのが間違っている。三洋電機はカリスマオーナーの後継者に息子を継がせようとしてつまずいた。

国も災害復旧に当たって、嘘までついて官僚のつじつま合わせをする。誰のために何の目的で、自分達の仕事や今の仕組みや制度があるのかを常に考えながら行動することが大事であり、それがミッションだ。

城巡りと仕事

岡本 圀衛氏
日本生命相談役
（11月6日）

城巡りが趣味で、今まで734城に行った。仕事上だけでない付き合いが広がり、信頼感もわき、コミュニケーションが深まる。

会社の命令で留学した時に「その時代に適していなければ変えていかなければならない」という発想法を学んだ。会社が大きく変わろうという時にはトップが「これは自分の仕事だ」と思うことが大切だ。

一方、今、副会長をしている経団連は、ソサエティ5・0と「貧困をなくそう」「エネルギーをクリーンに」など17の目標を国連が進めるSDGs（エス・ディー・ジーズ、持続可能な開発目標）に取り組んでいる。海外、特にヨーロッパの人と話をする時にはSDGsをどれくらい真剣に考えているかということが、一つのベースになる。

築地朝塾までの道

平本 和生氏
BS・TBS前会長、築地朝塾塾長
（11月13日）

私が薫陶を受けた人は「汗かけ、恥かけ、手紙書け」ということを言っていた。最近はラインやSNSで事足りるだろうが、本当に大事な人には自分の整理力、伝える力を磨くためにも手紙を書くのがいい。

以前外国から来た2人に「日本をどう見ているか」と聞いた。2人が共通して言ったのは「とっても面白くない」という。「どこが悪いのか」と聞き返したら、「判断が恐ろしく遅い。ハングリー精神もほとんどない」。つまりアップグレードし、完成してしまった日本を感じるというのだ。「日本の青年には欲がない。社会貢献にも政治にも関心が薄い。頑張りがいがない」とも言った。

日本はエスタブリッシュメントされて大会社が日本経済を引っ張っている。そこに閉塞感と突き破れない重い雲が立ち込めているのか、と感じる。これは私が築地朝塾を立ち上げた動機にも若干共通している。

大企業のパワーはすごいし、市場を押さえ、人材を抱え、データの蓄積もある。完全防衛体制も出来ているはずなのになぜ東芝問題や不正検査事件が起きるのか。築地朝塾新聞（第6号）に「危機は来る」というコラムを書いた。

今日しゃべったことの多くはその中に埋め込まれているので、もう1回読んで、危機感を忘れずに進んで欲しい。

反逆を傳統に

道場 六三郎氏
料理人、銀座ろくさん亭・懐食みちば主人
（11月20日）

銀座の雑居ビルで店をやって50年。売りは「包丁持って50年。クラブ握って60年」。ゴルフが好きで、勝負の世界は本当に紙一重だとつくづく思う。

生まれは石川県の山中温泉。終戦の時は14歳。食べ物が全然なく何でも食べた。

金沢の近江町市場の魚屋を手伝っていた時に魚を納めていた旅館の料理長から「早く手に職をつけた方がいい」と言われ、料理人になろうと決意した。

19歳で上京し、銀座「くろかべ」に。それから師匠の杉本成次郎さんに出会って「神戸観光ホテル」に行った。杉本さんからは、「料理人は隙があってはだめ」などと教えられた。布巾はきっちりしぼり畳んで所定の位置に置く。カウンター前の美しさを厳しく言われた。乾いていると不潔な感じがするのでいつも湿らせて布巾で拭く。汚いものが汚く映らないようにする。それが大事だ。人生の中で男は必ず一人になるときがある。少し料理を覚えておくといい。小さな勇気、小さな幸せ。一歩踏み出す小さな勇気、そこに小さな幸せが見つかる。

2019年

「新時代の競争政策」

6月18日

杉本 和行
（すぎもと・かずゆき）
公正取引委員会委員長

1974年東京大法学部卒、大蔵省（現財務省）入省、財務省大臣官房長、主計局長を経て、2008年7月から翌年7月まで財務事務次官。東京大公共政策大学院教授、11年弁護士登録。みずほ総研理事長などを歴任し13年3月から公正取引委員会委員長。主な著書に「経済成長と財政健全化の研究—持続可能な長期戦略を求めて」（2010年中央経済社・共著）がある。

「激動の世界情勢を読み解く」

6月25日

岡本 行夫
（おかもと・ゆきお）
外交評論家

1945年、神奈川県生まれ。68年一橋大経済 学部卒、外務省入省。北米局安全保障課長、北米第一課長などを歴任し91年退官。岡本アソシエイツ設立、代表取締役就任。96年～98年（橋本内閣）首相補佐官。2001年9月内閣官房参与、03年～04年首相補佐官。12年、マサチューセッツ工科大学CISシニアフェロー。著書に「砂漠の戦争 イラクを駆け抜けた友、奥克彦へ」（文藝春秋）、「さらば漂流日本」（東洋経済新報社）など。

築地朝塾歴代講師&講演テーマ一覧

敬称略・肩書きは講演当時のもの・講演順

各界から有識者そろう

2015年秋塾		
岡本 行夫	外交評論家・元総理補佐官	「みなさんが世界に羽ばたくために」
藤井 裕久	元財務大臣	「私が安保法制に正面から反対する理由」
丸島 俊介	日本弁護士連合会元事務総長	「21世紀日本社会の課題と人材育成」
北代 耿士	日本エア・リキード取締役会長	「あなたは世界で戦えますか」
宮家 邦彦	キヤノングローバル戦略研究所研究主幹	「新民族主義の危険」
堤　伸輔	新潮社編集委員	「難しい人との付き合いを避けるな」
佐野 尚見	松下政経塾塾長	「松下幸之助の経営理念と松下政経塾」
安藤 優子	ニュースキャスター	「人から話を聞き出す術」
小笠原 倫明	元総務省事務次官	「情報通信の現状と課題」
由紀 さおり	歌手	「私の中でのイノベーション」
森田 正光	気象予報士	「地球温暖化による環境への重大な危機」
2016年春塾		
野田 聖子	衆議院議員	「政治家として、今思うこと」
御厨　貴	東京大学名誉教授	「政治家の見極め方」
山口 由美	ノンフィクション作家	「富士屋ホテルに夢を掛けた男たち」
諸田 玲子	小説家	「語りかけてくる歴史と向かい合って」
関口　宏	司会者	「テレビと歩んで半世紀」
野副 正行	元ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント社長	「グローバルな視点と変化を恐れぬ勇気を」
萩野 慎二	NEC「はやぶさ」元プロジェクトマネージャー	「はやぶさ1号成功への苦闘」
筒井　修	「和僑」創設者	「和僑、外国で生き抜く日本人」
坂本 光司	法政大教授	「日本でいちばん大切にしたい会社」
音　好宏	上智大教授	「メディアと権力」
早野　透	元朝日新聞政治部	「田中角栄の時代」
2016年秋塾		
出口 治明	ライフネット生命保険会長	「無敵の50代になるために、今やるべきこと」
石破　茂	前地方創生担当相	「人口減少に向き合い、地方創生で次の時代の日本をつくる」
外山 滋比古	英文学者、エッセイスト	「生活の中の思考」
松井 秀文	元アフラック会長	「経営で大切にしたこと」
岸井 成格	毎日新聞特別編集委員	「日本の政治、そしてメディアを考える」
大坪 文雄	パナソニック特別顧問	「ものづくりを考える」
谷川 浩司	日本将棋連盟会長	「常識外の一手」
高原 耕三	真言行者、元総務省総務審議官	「私の体験的信仰談」
高木 ゆかり	IMG Media シニア副社長	「スポーツビジネスの世界を生き抜く」
岡本 行夫	外交評論家・元総理補佐官	「トランプ政権下の日米関係を読む」
秋葉 忠利	前広島市長	「オバマ大統領の広島訪問とその意味。トランプ勝利の背景との関連も」
2017年春塾		
古賀　誠	元自民党幹事長	「私の政治活動を振り返って」
古賀 信行	野村ホールディングス取締役会長	「これからの日本に必要なモノ」
後藤 康浩	亜細亜大学教授	「下がる中国、上がる中国～激変中国を見逃すな」
鈴木 幸一	インターネットイニシアティブ代表取締役会長	「序章から次へ、インターネットが変える社会」
藻谷 浩介	日本総合研究所調査部主席研究員	「アベノミクスの空騒ぎと日本経済の実相」
澤地 久枝	作家	「瀬戸際の民主主義」
伊東 豊雄	建築家	「21世紀建築の夢」
山縣 裕一郎	東洋経済新報社代表取締役社長	「メディアが直面する現状と課題」
御厨　貴	東京大学名誉教授	「天皇退位問題からこの国を問い直す」
川上 かおり	ハット研究所所長	「ISISを生んだ中東情勢」
堀内 丸恵	集英社代表取締役社長	「出版業界のこれからの姿」
2017年秋塾		
野田 佳彦	前内閣総理大臣	「内外情勢について」
細貝 淳一	(株)マテリアル社長「下町ボブスレー」著者	「『下町ボブスレー』の挑戦」
中村 敦夫	俳優	「線量計が鳴る」
野嶋　剛	ジャーナリスト	「朝日新聞から国際ジャーナリストへ」一紙とウェブを使いわけ、国境を超える発信を模索する道
亀石 倫子	弁護士	「GPS捜査事件と共謀罪」
菅付 雅信	編集者/(株)グーテンベルクオーケストラ代表取締役	「物欲なき世界の 先にあるもの」
与良 正男	毎日新聞専門編集委員	「政治の行方 メディアの行方」
佐高　信	評論家	「いま、日本を読む」
岡　康道	クリエイティブディレクター、CMプランナー、コピーライター	「本質をつきながら、意表をつく」
泉谷 直木	アサヒグループ ホールディングス会長	「信念・矜持・気概」
呉　公太	在日本大韓民国民団 中央本部　団長	「民団70年の歩み」
2018年春塾		
福田　淳	ブランドコンサルタント/ソニー・デジタルエンタテインメント前社長	「全開！五感で生きるハイテク時代」
村上 誠一郎	衆議院議員	「わが国の三大危機と2020年問題」
倉本 昌弘	日本プロゴルフ協会会長	「ゴルフが上手くなりたいですか？ゴルファーになりたいですか？」
須永 珠代	トラストバンク代表取締役	「なぜ ふるさと納税？」
外山 滋比古	英文学者、文学博士、評論家、エッセイスト	「『純』より『雑』人間の創造的活動の源」
福井 俊彦	元日銀総裁/キヤノングローバル戦略研究所理事長	「まだ間に合う、未来へ向けて飛躍せよ」
玉木 林太郎	元OECD事務次長/国際金融情報センター理事長	「世界を変えていくもの≪例えば気候変動について≫」
面出　薫	照明デザイナー、ライティングプランナーズ アソシエーツ代表取締役	「建築照明デザインと照明探偵団」
南　美希子	エッセイスト、司会者、TVコメンテーター	「女性アナウンサーはいかにして女子アナになったか」
川崎　哲	核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員	「核兵器禁止条約を生かすために」
宮内 孝久	神田外語大学学長	「真贋を見極める努力を」
2018年秋塾		
山本 良一	J.フロント リテイリング取締役兼代表執行役社長	「時代の変化とJFRの成長戦略」
佐藤 雅彦	東京藝術大大学院映像研究科教授	「作り方を作る」
田川 博己	JTB代表取締役会長	「観光先進国をめざして」
阿川 佐和子	作家、エッセイスト	「明るい介護」
辻元 清美	衆議院議員、立憲民主党国会対策委員長	「まっとうな政治を取り戻すために」
髙田　明	「株式会社 ジャパネットたかた」創業者	「夢持ち続け日々精進」
保阪 正康	ノンフィクション作家	「人を見る目 私的ノンフィクション論」
片山 善博	早稲田大公共経営大学院教授、元鳥取県知事	「ミッションを考える」
岡本 圀衛	日本生命相談役	「城巡りと仕事」
平本 和生	BS－TBS前会長、築地朝塾塾長	「築地朝塾までの道」
道場 六三郎	料理人、銀座ろくさん亭・懐食みちば主人	「反逆を傳統に」

塾終了後に開かれた「夜塾」。時間を忘れて懇談を重ねました。

大いに盛り上がった夜塾

関口宏さんも特別参加

2018年秋塾の総括・反省と、塾生たち相互の交流を深める「夜塾」が、11月20日午後7時から東京都港区のIT健保会館で開かれました。塾生、運営委員ら計59人が参加。16年春塾に講師として登壇してくれたテレビ司会者の関口宏さんが特別ゲストとして加わり、立食パーティー形式での語らいは、一同時間の経過を忘れるほどに盛り上がりました。

まず、平本和生塾長が「人生の先輩たちの話を生で聞くことができる朝塾での体験を大切にして、誠実に生きていこう」とあいさつしました。

関口さんは「平本君が朝塾を続けているのはあっぱれ。今日はエールを送りにきました。『若いジャーナリストを育てたい』ということで、朝塾を始めたのでしょう。ぜひとも次世代のジャーナリストをたくさん育ててください。みなさんが集めてくる情報で、私はテレビ番組を作らせてもらいます。TBSのサンデー・モーニングを担当して、30年が過ぎました。論客の方々が番組を支えてくれています。私も後期高齢者になり、いつまで続くか分かりませんが、続く限りはやりたい。ぜひ応援をお願いしたいです」と語りました。

この後塾生一人一人が秋塾の感想やそれぞれの思いを話しました。

朝塾の応援団長を自認する外交評論家の岡本行夫氏は「平本さんがこういう企画をしていることを心から尊敬しています。こうやって若いみなさんとお会いできるのがうれしい。この間も母校の入学式に呼ばれて記念講演をし、若者たちに『牛後を目指せ』と話してきた。たとえビリでもいいから、大きな人たちに付いていく。その人たちと交わってどんどん前へ行って、やがてそこのリーダーになる可能性が開けてくる。自分が〝この人だ〟と思った先輩や上司、友人に食らいついてでも、良い面を吸収していくべきだと僕は思っています。若い人にもそう言っています。平本さんのような人に付いていって、素晴らしい人たちにめぐりあい、自分のフロンティアを切り開いていってください」と訴えて、締めくくってくれました。

有難うございました

塾生アンケート

第7期2018年秋塾の塾生アンケートの結果が出ました。18人(男性11人、女性7人)が回答を寄せてくれました。データ的にはやや少ないですが、満足度調査では無回答の2人を除き「とても満足」が68・8%、「やや満足」が18・8%、「どちらでもない」と「とても不満」が各6・3%という評価で、「とても満足」「やや満足」を合わせた満足した人は87・5%でした。

「とても満足」と評価した人に理由を聞いたところ、「普段かかわることのない様々な分野の専門家から現場ベースで話を沢山いただくことができたから」(20代男性)▽今回は特にパワフルな人が多かった。また著名な方が多くテレビで見るのとは違う素顔に心を打たれたりしました」(50代女性)▽「仕事、個人的な悩みと、大変参考になる話ばかりで濃密な時間を過ごさせていただきました」(20代女性)▽「一つのカテゴリーに偏らず、立場や環境が違うにもかかわらず同じようなメッセージを発せられる方々もいて重なる部分こそ大事なのだろうと実感した」(30代男性)——といった声がありました。

「やや満足」だった人からは「全体としては満足しているが、中には少し期待とは違った講演もあったため」という意見が出ていました。また、「どちらでもない」とした受講生からは「時間延長が多くて困りました」との指摘がありました。

朝塾に対しては「人生が少しずつ良い方向に変わっていくのが分かります。ありがとうございます」(30代女性)との感謝の声があったほか「自分の選択だけでは聴くことのできない話、トピックだったので、これからも幅広いジャンルからのゲストの話を聞きたいです」(20代女性)との要望もあった。さらに夜塾について「楽しく過ごせたのですが、もう少し時間が欲しかった気がした」(30代男性)▽「一人一人前に出て語る方式ではなく、ずっとフリーの団欒の方が塾生と交流できるのでいい」(30代女性)との感想も見られました。

築地朝塾スタッフ(敬称略)

塾長・平本和生▽代表・金子秀明▽専務理事・藤嶋淳▽会計監査・国谷和夫▽事務局長・中村加代子▽事務局次長・先山美保子▽運営委員広報担当・滝上広水、竪場勝司、宗岡秀樹▽運営委員・阿部峰子、今井田光代、江間維利、斉川由紀子、佐藤恭裕喜、中村保、冨士絢子▽企画委員・堤伸輔、森忠彦

2019/03/29　12:24:57